

バラ科 フレモコウ属

フレモコウ (吾木香)

Sanguisorba officinalis L.

自生環境

土手、野原 など

原産地

日本在来

生育を脅かす要因



定期的に草刈りが行われるような昔ながらの草原環境を好みます。しかしこのような草原はどんどん少なくなり、残された場所も外来種の繁茂などで環境は悪化しています。

特徴

- ☆ 定期的に草刈りが行われるような日当たりのよい草原に生える多年草です。市内では利根川や江戸川、利根運河の土手の斜面草地に多く見られます。根茎は太くてがっしりと根を張り、引っ張っても簡単には抜けません。
- ☆ 小葉は楕円形で縁はギザギザしています。小葉の枚数は5~13枚です。葉をもむとほんのりスイカのような匂いがします。早朝には、葉から排出された水分が、縁に水玉となってぶら下がる様子がよく見られます。
- ☆ 茎は上部でさかんに枝分かれをし、高さ1 m ほどになります。そして8~9月頃、茎の先に長さ1~2cm ほどの花の穂がつかます。花に花びらは無く、4枚のがくが花びらのように見えます。がくの色は花が終わった後もしばらく残ります。

市内の分布状況

市内では利根川、江戸川、利根運河の堤防に多く自生しています。



名前の由来に諸説あり

平安時代にはすでにその名前が使われていたというフレモコウ。以降、さまざまな古典文学にも登場し、身近な秋の野花として親しまれてきました。しかしその名前の由来ははっきりせず、さまざまな説があります。それに対応して、吾亦紅、吾木香、割木瓜など充てる漢字もさまざまです。その中のひとつ吾木香は、根に芳香があるキク科植物のモッコウ (木香) にちなむといえます。



茎の先に茶色い花の穂がつく

茎は上部でさかんに枝分かれする



花びらは無い。4枚のがくが花びらのように見える

花は上から下へと咲き進む



がくの奥にタネが1個入っている

がくは果実期もそのまま残る



しょうお小葉

春になると株もとから新しい葉が出てくる

小葉は5~13枚

小葉の縁のギザギザは丸みを帯びる



わぴちゃんねる 千葉県野田市の植物を動画で紹介!

<https://www.youtube.com/channel/UCJvrXBjegnWATWd-UZsNzCA>

